

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学			研究科	キリスト教学	専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程三年		橘 耕太		印	
指導教員	所属・職名		氏名			
	文学部・教授		廣石 望		印	
自然・人文・社会の別	人文		個人・共同の別	個人		
研究課題	原始キリスト教、ヘレニズム・ユダヤ教、任意団体における共同体形成の比較研究					
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程三年		橘 耕太			
研究期間	2016 年度					
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

最初期キリスト教共同体の形成モデルの考察を、聖書資料、聖書外資料ならびに同時代の地中海世界文献資料と碑文資料を用いながら、特に(ディアスポラ)ユダヤ人共同体、任意団体と比較し、類推することで行う。さらには同様のアプローチを用いて、最初期キリスト教共同体が形成した超地域的ネットワークの再構成を最終的な目的としている。

本年度はその中でも、碑文資料を用いてローマのユダヤ人共同体を、そして聖書資料を用いてローマの最初期のキリスト教共同体を考察し、そのうえで両者を比較することに重点を置いた研究を行った。

その中で、両者の比較・類推を行う際に、デロス島の任意団体に関する考察を参考とした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[原始キリスト教] [ディアスポラ・ユダヤ人] [任意団体]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

最初期キリスト教はどのように形成され、発展拡大していったのか。その問いに対して、最初期キリスト教の形成モデルとは何か、をアプローチの鍵として、最初期キリスト教共同体、特にそれが形成した超地域的ネットワークの再構成を目指す。

その目的に際して、現在学界で比較事例として検討されているものの中から「ユダヤ人共同体」と「任意団体 (Voluntary Association)」を挙げる。資料としては、新約聖書資料、聖書外資料、文献資料といった従来参照されるもののほかに、碑文資料、考古学資料を用い、それらをクロスオーバー的に使用することによって、最初期キリスト教研究の問題点となっていた資料の欠乏を解消することを可能にする。

すなわち、最初期キリスト教の形成・拡大の過程で、どのように彼らが自分たちの出自であるユダヤ人共同体、および同時代の周辺地中海世界の任意団体との関係を保ち、また参照・利用したのか、そして地中海世界全体にすでに張り巡らされていたそれらのネットワークとどのような相互関係を持ち、競合し、併存し、敵対し、利用したのかを明らかにする。

以上が立教 SFR における大きな研究テーマである。その中でも本年度は、単一の都市内で複数の小共同体が形成される際の基準についての考察を中心に進めた。対象地域は都市ローマである。

都市ローマの最初期のキリスト教共同体については使徒行伝 28:15 (そこには二つの共同体の存在が示唆される)、および以下で考察するロマ書 16:3-15 のリストといった聖書テキストから、また都市ローマのユダヤ人共同体については、カタコンベ出土の碑文から、それぞれ複数の小共同体の存在が想定可能である。

まずはじめに、ロマ書 16:3-15 のリストから見える、ローマの最初期キリスト教共同体について簡潔にまとめた後、碑文資料からわかるローマのユダヤ人共同体の形成基準について考察し、そこからローマの最初期キリスト教共同体の形成基準について記述する。

ロマ書 16:3-15 のリストには、26 の個人名と二人の名前のない人物、それは具体的にはルフォスの母とネレウスの姉妹である、が挙げられている。それと同時に、ここには五つの小共同体の存在が示唆されている。それは①プリスカとアクィラの「家の教会」②アリストブロスの (家の) 者たち③ナルキソスの (家の) 者たち④アシンクリトス、フレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマス、と共にいる兄弟たち⑤フィロロゴス、ユリア、ネレウス、その姉妹、オリュンパス、と共にいる聖なるものたち、である。

まず一つ目が①プリスカとアクィラの「家の教会」である。①プリスカとアクィラはいわずと知れた、パウロの同労者たちである。使徒行伝の記述からは、アクィラが小アジアのポントゥス出身であること、パウロと同じくテント職人であったこと、彼らがユダヤ人の夫婦であること、クラウディウスのユダヤ人追放令によってローマからコリントへとやってきて、その後エフェソへと向かったことがわかる。それゆえ彼らはその後ローマへと帰還したと想定される。

続いて二つ目の小共同体が、②アリストブロスの (家の) 者たちの共同体 (ロマ 16:10b) である。これは主人アリストブロスとその家の奴隷、もしくは解放奴隷のことを指していると考えられる。ただし、前置詞 ek が使用されていることから、その家の奴隷、もしくは解放奴隷の全員が最初期のキリスト教共同体に属していたとはみなされていない。

特に主人アリストブロスに関しては、この箇所ではその個人を直接言及されているわけではないために、彼自身は最初期キリスト教共同体には属していないと考えられている。アリストブロスという名前に関しては、この名前がローマ出土の碑文にわずか二度しか言及されていないことから、ローマの地元民ではなく、移住者であった可能性が高い。ヨセフス「古代誌」18.273-276によると、アリストブロスなる名前はヘロデ・アグリッパの兄弟と同じ名前であり、同一人物であった可能性もある。もしそうであった場合、彼は比較的高位の人物であり、その奴隷たちもしくは解放奴隷もまたそれ相応の地位にあったと考えられよう。

研究成果の概要 つづき

三つ目の小共同体が③ナルキソスの(家の)者たちの共同体(ロマ 16:11b)である。前のアリストブロスの(家の)者たちの共同体と同じく、これは主人ナルキソスとその家の奴隷、もしくは解放奴隷のことを指していると考えられ、また、その家の奴隷、もしくは解放奴隷の全員が最初期のキリスト教共同体に属していたとはみなされていない。さらに主人ナルキソスに関しても、この箇所ではその個人を直接言及されているわけではないために、彼自身は最初期キリスト教共同体には属していないと考えられる。ナルキソスという名前は解放奴隷に多い。

四つ目の共同体が④アシンクリトス、フレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマス、と共にいる兄弟たちの共同体(14)である。最後が⑤フィロロゴス、ユリア、ネレウス、その姉妹、オリュンパス、と共にいる聖なるものたちの共同体(15)である。この二つのグループの成員は、奴隷もしくは解放奴隷であった可能性が高い。

次に、都市ローマのユダヤ人共同体についてである。そこではユダヤ人カタコンベから出土した碑文、もちろん墓碑銘、から少なくとも 11 のシナゴグの存在が明らかになっている。(丸数字は碑文の番号)

各ユダヤ人小共同体の名称から見えてくる、共同体形成の、成員採用の基準は五つに分類可能である。人物が①アウグストゥス人/②アグリッパ人/③ウォルムニウス人、場所が④マルスの野/⑤スブラ/⑥石灰職人、出身地が⑦トリポリス(フェニキア/アフリカ)人/⑧エレア人/⑨「土地の者たち」、その他が⑩「ヘブライ人の会堂」、不明が⑪セケニアズである。

次に、都市ローマのユダヤ人小共同体の類型にローマの最初期キリスト教共同体の分類を当てはめてみる。まずは①プリスカとアクィラの「家の教会」についてである。使徒行伝等によれば、彼らはコリントおよびエフェソで伝道活動を展開していたために、そこからそれらの地域との関連が最初に想定されるであろう。その場合はコリントおよびエフェソで彼らの活動に触れた人物が、ローマへとやってきて、彼らの共同体に属したケースと、もともとローマにいて、彼らの伝道地域に関係を持っていた人物が彼らの共同体に属したケースが考えられる。また、アクィラはポントゥス出身がゆえに、2-2-c の出身地という類型を当てはめることが可能であろう。この想定は先の想定とは決して相反せず、むしろポントゥスも小アジアであるがために、同じ小アジアであるエフェソもまた出身地別類型に当てはめることができると言うことも可能かもしれない。

そのようにしていくと、ほかの四つのローマの最初期キリスト教共同体は、②アリストブロスの(家の)者たちと③ナルキソスの(家の)者たちは人物という共同体形成基準に当てはまる。反対に④アシンクリトス、フレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマス、と共にいる兄弟たちと⑤フィロロゴス、ユリア、ネレウス、その姉妹、オリュンパス、と共にいる聖なるものたちは分類が不能となる。

このように、都市ローマのユダヤ人小共同体を類推対象として、同地域の最初期のキリスト教共同体を分類するという試みは、完全にはうまくいかないことが分かった。

しかし、このアプローチ自体の有効性はより対象を増やしていく中で、発揮される可能性が高いものである。

なお、共同体形成基準を用いた、共同体の分類というアプローチや、分類項自体は、任意団体におけるそれらを参考としていることを最後に指摘しておく。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

・橋耕太「使徒行伝6章の『ヘレニスタイ』はだれか—その歴史の実体と地理的拡大」『聖書学論集』47号、2016年、33-58頁。

② 図書

・マイケル・コリンズ総監修、宮崎修二監訳、明石書店、『ビジュアル大百科 聖書の世界』2016年、511頁 (共訳、348-357、414-449、484-491頁を担当)

③ シンポジウム等

なし

④ その他

・発表「ユダヤ的出身地別共同体とテオドトス碑文」(古代・東方キリスト教研究会、2016年4月3日、於東京大学駒場キャンパス)

・発表「ユダヤ的出身地別共同体とテオドトス碑文」(日本聖書学研究所例会、2016年6月20日、於日本聖書神学校)

・発表「原始キリスト教、ヘレニズム・ユダヤ教、任意団体における共同体形成の比較研究」(日本新約学会、2016年9月9日、於関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス)

・書評「廣石望ほか著『新約聖書解釈の手引き』」『キリスト教学』58号、2016年、143-147頁。